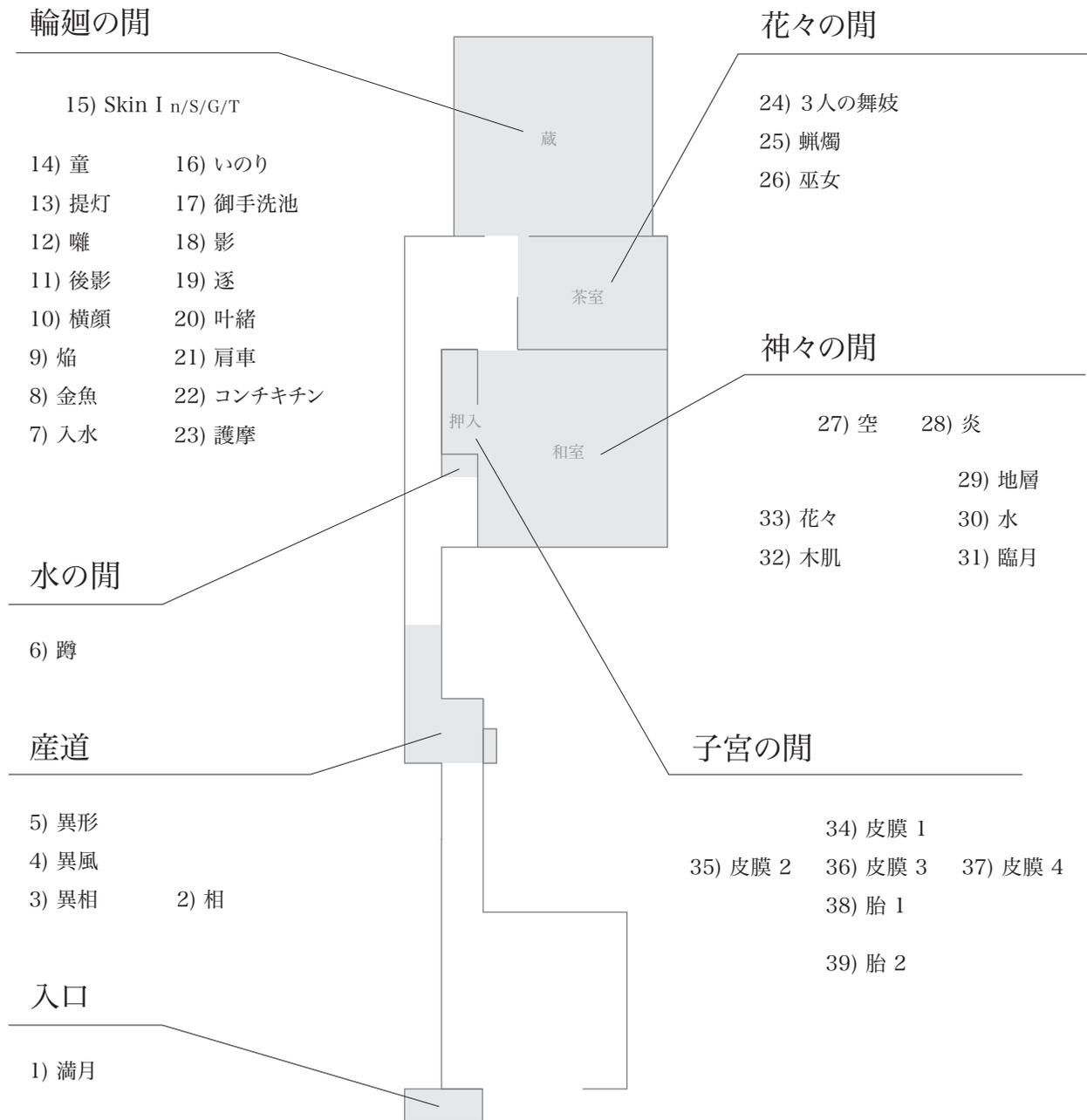


展示会場案内図



会 期 2016年4月21日(木) ~ 5月22日 (日)

会 場 清課堂 京都市中京区寺町通二条下ル

電話: 075-231-3661 <http://www.seikado.jp>

※輪廻の間、Skin作品のお買い求めを希望される場合は、下記のIBASHOギャラリーへ直接お問い合わせください。

IBASHOギャラリー (ベルギー) <http://www.ibashogallery.com/> info@ibashogallery.com



荻野NAO之 写真展 「間会(まかい)」

京都に移り住んで7年。ふと京都での日々を振り返ると、いたるところで非日常と日常の狭間と遭遇したように思う。または虚と実の狭間、旧と新の狭間、陰と陽の狭間に。そんないろいろな狭間の「間」との一瞬一瞬の出会いを『間会』として繕い集めようと思う。人の世の、そして京の都の『いのちの環』(KYOTOGRAPHIE 2016のテーマ)を『間会』の佇まいから改めて見据えなおそうと思う。

表現に携わる人間として、現代社会のいろいろな問題にどう眼差すのかを自分なりに考えるとき、どうも私の場合一刀両断的な明快な解決への新提案といったものにはならない。分けることもできないような狭間の領域をそのまま許すこと、そうすることで両側の交通の大きな可能性が生きるように思う。狭間がなければ、何も生まれられないのではないかとすら思う。狭間は、陽(陰)ばかりでなく陰(陽)をも受け入れ、何かに固執することもなく変化を受け入れ、何かを別け隔てることもなく重なりを許す。明快な解決はされない。故に何かに捕われることもなく、切り離されることもなく、化石化することもなく、殺すこともなければ、殺されることもなく、生きたままで佇んでいられる。そうして狭間が生きていることで、旧新といった時代の繋ぎ目や、ローカリティとグローバリティの繋ぎ目が、または文化と文明の繋ぎ目が、流動的にバランスされるのだと思う。これは、現代社会の中で排除されてきた多くの曖昧なものや目に見えないもの、証明できないものや秘密のものものを思い出すことであり、メント・モリ=死を思い出すことでもあって、そうしてようやく生の息吹を吹き返すことでもあろうと思う。『間会』とは、狭間の繋ぎ目にいつでも戻れるということ、環を損なわずにおける大事な所作なのではなかろうか。そうすることで、色々な『いのちの環』を失わずに生きられるのではなかろうか。

「ま」の字には「間」ではなく、敢えて旧字体の「間」を用いた。「月」がいつのまにか「日」になっているのは、現代社会が正に「陽」のものばかりになっている姿を暗示しているように思われる。もともと中国では「間」と「間」は異なる発音で異なる字として使われているらしい。また、同じ「ま」でもかつて「間」は“あいだ”を、「間」は“ひま”を表したともきく。それはそれで、「ひ(秘)」められた「ま」に会うということで、『間会』が良い。音としての日本語とすれば、もはや漢字に頼らず『まかい』で良いようにも思われるが、『魔界』の印象が強いようなので、あえて『間会』とした。または『まあひ』としても良かったかもしれないが、今回は『魔界』も内包した『まかい』としての『間会』とした。

多くの狭間がなくなりつつある現在、この世とあの世の繋ぎ目だと言われる「縁側」も少なくなった。その両側の緊張が失われない中での、狭間にある縁側の心地よさのようなものが、この『間会』に現れたら幸いである。

展示写真(オリジナルプリント)について:

英国人発明家ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットが1830年代に発見した写真最初期の古典印画技法であるソルトプリント。当作品は、極薄の手漉越前雁皮にこの技法を用いて荻野がプリントを手制作したもので、表面には国産の蜜蝋でコーティングが施されている。尚、一部の作品は、伊藤若冲の裏彩色から着想を得て開発した独自のプリント(naotype)で、このソルトプリントの裏側から金属箔を貼ったもの。

写真家 荻野NAO之

東京生まれ、メキシコ育ち、京都在住
名古屋大学理学部物理学科卒業
第一回日本写真家ユニオン大賞
写真集に「A Geisha's Journey」ほか
<http://www.naoyukiogino.jp/>